

Ichthyological Research 69 巻 2 号掲載論文 和文要旨

オーストラリア西岸から得られた 2 新種の記載を伴うインド・太平洋におけるフサカサゴ属（真骨類：フサカサゴ科）の分類学的再検討

Kunto Wibowo・本村浩之

モノグラフ 69(2):199–235

インド・太平洋におけるフサカサゴ属 *Scorpaena* の分類学的再検討を行ったところ、2 亜種・2 新種を含む 21 有効種と 12 異名を確認した。この 2 新種、*Scorpaena longaecrista* と *Scorpaena sororreginae* をそれぞれオーストラリア西岸から得られた 50 と 23 標本に基づき記載した。本研究では、これまでの研究で知られていた形質やタイプ標本と一般標本の調査に基づき、インド・太平洋における本属の特徴を再定義した。また、インド・太平洋におけるフサカサゴ属の各有効種の標徴、異名、分布、および調査標本リスト（これらに加え、詳細な先行研究がある場合にはその適切な引用）を示し、検索表を付記した。

(Wibowo: 〒890-0065 鹿児島市郡元 1-21-24 鹿児島大学大学院連合農学研究科; 本村: 〒890-0065 鹿児島市郡元 1-21-30 鹿児島大学総合研究博物館)

大西洋南西部に面した湾の砂浜海岸における魚類群集の構造

Samara Macedo Pinto・Cassiano Monteiro-Neto・Elisabete Barbarino・

Rafael de Almeida Tubino・Marcus Rodrigues da Costa

本論文 69(2):236–247

ブラジルのグアナバラ湾において、砂浜海岸の浅海魚類群集構造の時空間的な動態と物理化学的変数との関係を調べた。2016年6月から2018年5月にかけて、湾口周辺から湾奥に沿った6つの砂浜海岸で、地曳網を用いて魚類を毎月採集した。稚魚を中心に計79種の魚類が採集された。湾全体には *Atherinella brasiliensis* が、湾中央部には *Eucinostomus argenteus* が、湾口には *Harengula clupeola* と *Diplodus argenteus* が、湾口周辺の外洋に面した場所には *Umbrina coroides*, *D. argenteus*, *Dactylopterus volitans* が分布していた。すべての分析で、魚類群集の構造は湾口周辺部と湾中央部・湾奥部に大別された。透明度とクロロフィル a は空間的に大きく変動し、魚類群集構造の空間的差異に重要な役割を果たしていた。水温は魚類群集構造の季節的変動に寄与していた。すべての調査地で多くの稚魚が確認されたことから、湾全域が稚魚の成育場として重要であることが示唆された。

(Pinto · Monteiro-Neto · Barbarino · da Costa : Departamento de Biologia Marinha, Universidade Federal Fluminense, Outeiro de São João Batista S/N, Niterói, Rio de Janeiro 24020-141, Brazil; Tubino: Departamento de Biologia Animal, Universidade Federal Rural do Rio de Janeiro, Rodovia BR465-Km 07, Seropédica, Rio de Janeiro 23890-000, Brazil)

高知県柏島沖から得られたイレズミハゼ属 (スズキ目 : ハゼ科) の 1 新種 *Priolepis duostella*

小枝圭太 · 古井戸 樹 · 松野靖子 · 遠藤広光

本論文 69(2):248-255

高知県柏島沖の水深約 100 m の海底に 2.5 年間設置した人工魚礁から得られた 1 標本 (標準体長 28.8 mm) に基づき, イレズミハゼ属 (スズキ目 : ハゼ科) の 1 種 *Priolepis duostella* (新称 : ホウセキイレズミハゼ) を新種として記載した. 本種は本属に知られる 3 種群のなかで, 背鰭前方鱗があること, 峡部に発達した横列孔器をもつことにより特徴づけられる *Priolepis profunda* 種群に含まれる. 本種は尾鰭の上下に白線によって横切られる黒色斑がある, 頭部に 4 本の白色帯がある, 体に 6 本の白色帯があり, うち 2 本目から 4 本目が湾曲し, 2 本目および 3 本目の上端がそれぞれ背鰭の白色斜帯下端および第 2 背鰭起部から始まることで同種群の他種から明瞭に識別される. 本種は色彩においてコクテンベンケイハゼ *Priolepis akihitoi* に最もよく似るが, 眼径が頭長の 31.4% と大きいこと (コクテンベンケイハゼでは 26.1-30.3%), 両眼間隔が頭長の 10.9% と広いこと (5.3-7.8%), 体に 6 本の白色横帯があり, うち 2 本目から 4 本目が湾曲すること (8 本すべてが直線状), 尾鰭下部にも黒色斑があること (上部に 1 つのみあり, 下部にはない), 両眼間隔域の前横列孔器数 (ATI) が 3 で後横列孔器数 (PTI) が 4 または 5 であること (ATI, PTI とともに 1 または 2) により識別される.

(小枝 : 〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学総合研究博物館 ; 古井戸 : 〒788-0333 高知県幡多郡大月町西泊 560 番イ 黒潮生物研究所 ; 松野 : 〒788-0343 高知県幡多郡大月町柏島 130 柏島ダイビングサービス AQUAS ; 遠藤 : 〒780-8520 高知市曙町 2-5-1 高知大学工学部生物科学科)

異質四倍体性種のタンゴスジシマドジョウ *Cobitis takenoi* の唯一の生息河川における空間分布および同所に生息する四倍体近縁種との比較

八嶋勇氣 · 石原雅子 · 高久宏佑 · 入口友香 · 諸澤崇裕 · 北川忠生

短報 69(2):256-260

京都府丹後地方の野田川のみに生息する絶滅危惧種である異質四倍体性種のタンゴスジシマドジョウ *Cobitis takenoi* は、限られた河川区間にのみ生息していること以外に詳細な分布様式は不明であった。また、同区間において同属の四倍体種であるオオシマドジョウ *Cobitis* sp. BIWAE type A と交雑することなく共存していることが知られている。本研究では、タンゴスジシマドジョウの河川内での空間分布と、生息地選択性およびオオシマドジョウとの種間関係を調べるために、本種の非繁殖期である 11 月に生息河川全域の網羅的な採集調査を行った。タンゴスジシマドジョウはオオシマドジョウと比較して泥底を好み、特定の場所に集中する傾向があることが示唆された。

(八嶋・石原・北川：〒631-8505 奈良県奈良市中町 3327-204 近畿大学大学院農学研究科；高久・入口・諸澤：〒130-8606 東京都墨田区江東橋 3-3-7 一般財団法人自然環境研究センター)

河川性サケ科魚類の口腔内に寄生する *Salmincola* sp. (Copepoda: Lernaepodidae) の影響：標識捕獲調査による評価

Christopher G. Ayer・守田航大・福井 翔・小泉逸郎

短報 69(2):261-266

河川性サケ科魚類に寄生するカイアシ類 *Salmincola* spp. は、しばしば養殖池で大量発生し、宿主の食欲や成長率、生存率を低下させる。野外でも同等の影響を及ぼしうるのかを評価するため、北海道汐泊川支流で標識再捕調査を実施し、口腔内に寄生する *Salmincola* sp. が宿主イワナ *Salvelinus leucomaenis* の肥満度、成長率、生存率に与える影響を調べた。寄生率（宿主個体数あたりの感染個体数）は 13.1-15.5%，寄生強度（感染個体あたりの寄生虫数）の平均は 1.2-1.3 で、最大値は 4 であった。感染個体は非感染個体より体長が有意に大きく、体長と生存率には正の関係が認められた。一方、感染個体と非感染個体の間で、肥満度、成長率、生存率には有意な差が認められなかった。野外では、養殖池ほど寄生虫の感染率や感染強度が高くないため、宿主への影響は小さいのかもしれない。

(Ayer・守田・福井・小泉：〒060-0810 北海道札幌市北 10 条西 5 丁目北海道大学環境科学院)

東オーストラリア沿岸域における *Cnidoglanis macrocephalus* の生活史特性

Charles Gray

短報 69(2):267-274

東オーストラリア沿岸域の2つの河口域に生息する *Cnidoglanis macrocephalus* の生活史特性について初めて明らかにした。本種は藻場でより多く出現し、産卵は春から初夏にかけて行われていた。最高年齢は雄で9⁺、雌で20⁺と雌の方が高齢であったが、雌雄間で各年齢時の平均全長には雌雄間で、また河口域間で明確な違いはみられなかった。雌雄のデータをまとめて von Bertalanffy 成長曲線に当てはめた結果、 L_{inf} は61.2cm、 k は0.677、 t_0 は0.007とそれぞれ算出された。これまでに西オーストラリア沿岸域では *C. macrocephalus* に関する多くの生活史調査が行われているが、両沿岸域間で生活史特性には類似点、異なる点がそれぞれ確認された。

(Gray : WildFish Research, Grays Point, Sydney, NSW 2232, Australia)

アマゴ（サケ科魚類）の野生2集団における2つの雄性特異的な分子マーカーによる性別の有効性

上田るい・武島弘彦・佐藤拓哉

短報 69(2):275–279

本研究では、サケ科魚類のアマゴ *Oncorhynchus masou ishikawae* の有田川流域と長良川流域の2つの野生集団を対象として、2種類の雄性特異的な分子マーカー (*OtY2* と *sdY*) による性別の有効性を検証した。その結果、両集団において、表現型が雄のすべての個体では、いずれの分子マーカーについても PCR 増幅産物が得られた（陽性を示した）。一方で、表現型が雌の個体の中にも、2つのマーカーについて陽性を示す個体が確認された。有田川流域と長良川流域の2集団について、表現型が雌の個体の陽性率は、*OtY2* ではそれぞれ32%と11%、*sdY*ではそれぞれ71%と67%だった。これらの結果から、雄性特異的な2つのマーカーのどちらも陰性だった個体は、雌と判別できることが示唆される。すなわち、調査したアマゴ2集団では、2つの分子マーカー（特に *OtY2*）は、生活史研究や保全活動、および育種を実施する際に、効率よく雌を選抜することに利用できる可能性が高い。

(上田・佐藤：〒657-8501 兵庫県神戸市灘区六甲台町1-1 神戸大学大学院理学研究科；武島：〒424-8610 静岡県静岡市清水区折戸3-20-1 東海大学海洋学部)

自然産卵および孵化場由来のサケ稚魚における肥満度依存的な瞬発遊泳力

野畑重教・伯耆匠二・北川貴士・兵藤 晋

短報 69(2):280-286

三陸沿岸で孵化したサケ稚魚について、自然産卵および孵化場由来の稚魚の瞬発遊泳力をスタミナトンネルを用いて評価した。孵化場由来の稚魚では肥満度と瞬発遊泳力に有意な正の相関があったが、体重や尾叉長との相関は検出されなかった。一方、自然産卵由来の稚魚では瞬発遊泳力の個体差が大きく、また肥満度との相関も見られなかった。初期発生段階では体重増加と尾叉長伸長とのバランスの変化により肥満度が増加するが、この時期における十分な栄養条件での均整のとれた成長が、瞬発遊泳力を向上させることを示唆した。一方、自然産卵魚の瞬発遊泳力には、肥満度とともに野生下で培われた注意力や種々の経験も影響したため、個体差が大きく肥満度との相関がみられなかったと考えられる。

(野畑・兵藤：〒277-8564 千葉県柏市柏の葉 5-1-5 東京大学大気海洋研究所生命科学分野生理学部門；伯耆・北川：〒028-1102 岩手県上閉伊郡大槌町赤浜 1-19-8 東京大学大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センター；伯耆（現所属）：〒514-8507 三重県津市栗真町屋町 1577 三重大学大学院生物資源学研究科)